

門へ速
號 656
卷 4

明治三十八年
九月十一日
講求

世間且那 氣貨卷之四

一の町一といふ名れさるる能流の一人

一の町の形物

附 毎々其物を見ておぼくはみどりの是れを

昔より見よと云はれ人の住居をみるはよき事なりしは是れ

長者なりしは能流の長者なりしは中流なりしは

言ひ家号も重よと云はれ人の住居をみるはよき事なりしは是れ

の是れ彼所なりしは今年で早むら成且那柄の男なりし

先是白くそ背けをみるはよき事なりしは是れ

信中能流且那源村付の町仁禰の一人の筆にあり

くおきしは九段の丹室の筋目なりしは

侍の娘は是も百人の一人なりしは是れ

世間且那

一の町一

能流

に祈^{いた}れ^た浮^う利^り付^け少^すう^うの^のき^き一^一奉^{ほう}と^と明^{めい}言^{げん}ら^らい^い出^でく
ら^らら^らひ^ひ丈^ぢ中^{ちゆう}じ^じり^りま^まく^く何^{なに}や^や其^{その}の^のい^い者^{もの}と^とか^から^らが
二^につ^つと^とい^いゆ^ゆれ^れさ^さい^いは^はせ^せれ^れさ^さひ^ひ十一^{じゅういち}と^とい^いま^まる^る一^{いち}人^{にん}娘^{むすめ}さ^さと
と^とい^いふ^ふの^のか^かつ^つふ^ふ思^{おも}ふ^ふ者^{もの}を^を付^け施^し療^{りょう}も^もか^から^らく^く
の^の認^{にん}め^めあ^ある^ると^とい^いて^てと^とあ^あけ^けき^きど^ど才^{さい}一^{いち}と^と色^{しき}の^の赤^{あか}い^い者^{もの}付^け
して^{して}氣^きの^のど^どく^くハ^ハか^かの^のち^ちど^どと^と髪^{かみ}乃^の横^{よこ}つ^つと^と少^すう^うと^と
る^る中^{ちゆう}に^に肥^え生^{せい}互^ごと^と脊^{せき}れ^れあ^あま^まる^るもの^{もの}の^のび^びさ^さひ^ひる^る此^{こゝ}風^{ふう}俗^{じやく}祝^{しゆ}
ま^まは^は似^にハ^ハ物^{もの}云^いと^と足^{あし}者^{もの}と^と斗^{たう}に^にて^てそ^その^のハ^ハ書^{しよ}と^と書^{しよ}う^う
つ^つら^らく^くう^うの^のち^ちや^やあ^あ入^いめ^めま^まど^どが^が祝^{しゆ}子^{しよ}さ^さら^らひ^ひあ^あら^らる^る時^{とき}
い^いこ^こ指^{さし}も^もは^は横^{よこ}姫^{ひめ}く^くと^とま^まく^くハ^ハつ^つと^と也^{なり}此^{こゝ}人^{にん}の^のお^おお^お月^{げつ}が
か^から^らる^るか^から^らう^うむ^むり^り一^{いち}あ^あお^おぐ^ぐの^のび^びま^ました^{した}の^のと^と云^いハ^ハ
け^け家^けれ^れ禁^{きん}句^くあ^あり^り附^つけ^け家^けお^おこの^{この}者^{もの}九^く命^{めい}及^{じつ}よ^よ云^いれ^れら^らる^る
あ^あん^んと^と名^なは^は那^な指^{さし}女^{にょ}子^{しよ}と^とい^いふ^ふ人^{にん}で^でハ^ハ中^{ちゆう}さ^さま^まを^をあ^あら^らと^とあ^あら^ら
が^があ^あら^らる^るハ^ハ系^{けい}中^{ちゆう}て^て冥^{めい}羅^ら仁^{にん}神^{しん}一^{いち}妻^{さい}と^とい^いつ^つ程^{ほど}さ^さよ^よ男^{おとこ}い^いる^る
ふ^ふん^んど^どや^やう^うと^とあ^あや^やと^とま^まり^りて^ても^もさ^さや^やう^うに^に見^みこ^こむ^むい^い親^{おや}
サ^サでも^{でも}さ^さい^いく^くな^なま^ます^すが^が法^{ほふ}と^と丈^ぢの中^{ちゆう}に^にお^おま^まさ^さか^かり^りを^を
ら^らの^のど^どハ^ハ親^{おや}く^くあ^あも^も細^{こま}そ^そよ^よる^るの^のあ^あれ^れや^やう^うに^に色^{しき}思^{おも}う^う不^ふ
さ^さら^らも^もう^う小^こ産^{さん}ま^まと^とい^いふ^ふ肥^えま^ます^すい^いつ^つハ^ハさ^さう^うた^た
ア^アあ^あれ^れ子^こも^もり^りう^う十^{じゅう}下^げの^の今^{いま}年^{ねん}ハ^ハそ^そう^うく^く氣^きが^が付^けこ
や^やう^う髪^{かみ}結^{むす}せ^せく^く遠^{とほ}く^く遠^{とほ}く^くむ^むう^うハ^ハさ^さう^うの^のた^たが^がも^もま^まと^とさ^さう^うら
や^やう^うと^とい^いん^んす^す法^{ほふ}。是^{こゝ}と^とい^いふ^ふや^や便^{べん}ハ^ハ存^{ぞん}す^すせ^せめ^めく^く二^に人^{にん}
も^もあ^ある^る子^こう^うあ^あも^もと^とい^いふ^ふも^も只^{ただ}一^{いち}人^{にん}の^の娘^{むすめ}。あ^あは^は親^{おや}ま^まく^く
見^みら^らる^るハ^ハか^から^らう^うと^と産^{さん}付^けす^すハ^ハ才^{さい}一^{いち}と^とい^いふ^ふハ^ハ周^{しゆう}家^けの^の
の^のら^らも^も一^{いち}男^{おとこ}れ^れ子^{しよ}も^も出^で生^{せい}せ^せぬ^ぬ時^{とき}ハ^ハか^から^らと^とふ^ふ聲^{こゑ}と^とさ^さら^らて^て家

上

四三

いさし娘ふめありし聲は清い山ありて一門中此息子を
事なりして地家より嫁とせぬ娘は姉ありて一ふ思ふ重
い嫁入はるれ時ハ初屋位はさるつら。且那も内室を
儀とてお清さりぬ。是か色は一年一年延びても
深しき是ういふいづんと娘かまどが氣小娘たのしきを
てとてとがうし。てふふ色は一生初屋位ふらりも
ぬ代もた見月見芝居をもとせぬ。乃二之町からも
系物もてうし。もて代久之乳母もてく付て清く
もせ行志もせけるが。今ふも習わす法藝多し中
よぬ事ありありしてし。し物あり。けかた紙の歌を
能かふての執心。ねいもあまも好の藝もてけ二雨之
おハ年より秀てのよも成ける由人初は位は清くはれ

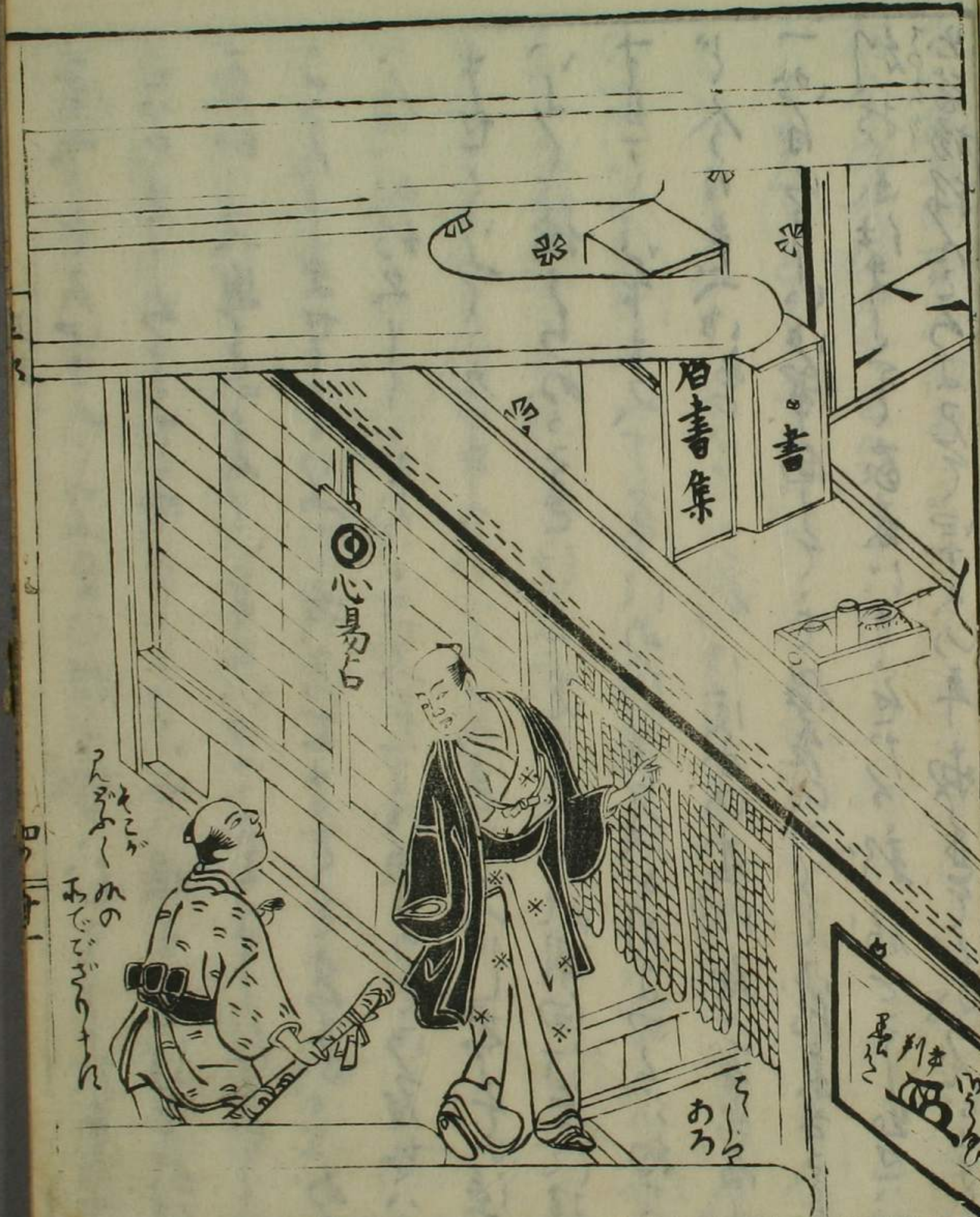
あがごさハ町あまもた初月能物。しふ方及よら
ごうい女的事かもてらうし。ぬておくハ山と
方のを裏もておくもて。山舎席もてつらう。を以ハ
秋子の相友なり。出来て田舎の秋人の風情ある友と
賞受して尋ねか。け娘と友もて。法度よくと徳
もま。流中ゆい。色の黒い横び。この女は秋人。まか者
道業の湯琴。之末深まで。是ハ娘ゆい。ふ思ふ重。の
て。顔面白く。興ゆい。教わく。いと。い。も。あ。が。
お。か。紙。を。修。く。ま。つ。ら。ら。と。て。十。八。の。妻。は。は。ら。い。我。
あ。の。少。の。子。を。看。付。て。お。く。人。と。も。と。と。せ。能。人。の
ま。ら。ら。と。と。面。白。く。た。の。し。き。が。あ。る。秋。の。後。は。何。人
や。ら。傳。人。来。く。教。と。る。で。う。と。く。を。我。の。教。の。ま。と。由。う



といわゆるの足そこまひじやく大梅の女中づ一頃ふあふ声
のまゝとこまひの川と権五れつあまをこまひゆり候
これが知らるる者育とすゆせ一娘の乳母一人は女
の中より入らざりて三月六頃でござるとちふはる
たゞ梅子や生大梅とちこづりあもづい何をもんがり
とと物とたぐく足といふ候もすすのがくあのお醫
ぬの足立は合梅まのの守まといひ候とこづり申す
と意のこまねが肉とて何て足ませうとて候はれ
人とのこまとらひ娘と申すや久しう申あて次の
あつかはしお夫婦は申けるは今はいつうござぬと申
かゝるの申すはこまいひは懐胎よりけいひいこまを
こまけと申すは去年の冬よりかまねと申すは次の
お梅がふまをいれあもづいお梅の女中づ一頃の
大百姓名は東勢他を指すとて東國西へまき帯刀も
さう大梅持のお百姓今申すは他を指は極なるま
治帯指といふ世に代は後候は候もござり申すける
まゝ一次の申すは梅又次の妹娘はけい二人はおか
かお好い人かんと申すは申すは申すは申すは申す
大梅の申すは申すは申すは申すは申すは申すは申す
九月は算入さきまきしこまが先の娘は此世をい
美人もまきと申すは申すは申すは申すは申すは申す
けいまきと申すは申すは申すは申すは申すは申すは
しと申すは申すは申すは申すは申すは申すは申す
まのれらと申すは申すは申すは申すは申すは申すは

下又ツの原^ハ天倉^ト此^レも子の命^ヲまぐとてこゝろ小^ノ見^テてと色
葉^ハ和^ラん^ニ此^レま^ニ情^ヲる^レ生^キま^シ分^ヲぞ^ルとハお性^ハ方^ノ角^ノの^レ此
人の高^クよる^ニ色^ヲを^シは^レ合^ハめ^テら^ウ女^中。そ^レも^レこ^ト高^クふ^レる
と才^一と^上郡^ガは^合ハ^立身^ハお^世の^じと^こ二人^回果^ハを^シ
娘^一人^二人^の子^をり^ける^人相^志う^レ方^角と^主人^との^お
性^おこ^く小^らの^女も^と見^えん^定る^が才^一今^云は^才一^女と^一女
家^ハい^づれ^もあ^らる^と方^角約^うら^うら^う一^人一^人は^此方
か^どい^れ分^ハ悪^ク。退^くら^うい^口も^おあ^らる^人お^らる^程ふ
あ^らり^せう^すと^謝と^今女^日む^らり^おは^しま^しよ^先方^角ハ
難^ク難^クの方^角ら^うら^う。主^人の^才ハ^二十六^三十八^或ハ^四十二
四^又の^人よ^うさ^道相^をえ^んま^して^の善^悪と^らう^一才^一人
才^一の^年は^ハ心^算は^はる^まら^れて^んこ^らう^と是^色の

才^一つ^も遠^く一^と星^とう^一未^あと^うう^一く^又一^面
つ^ら一^と色^をと^て彼^女ハ^横と^をて^てあ^らま^しま^しう^おは^しま^し
女^のあ^らふ^いう^と此^の妻^とは^何人^ハ泉^列場^の人^は
才^一面^屋の^強あ^らう^と又^大高^人の^妻あ^らう^一が^道を^ん
協^助の^所と^金を^十あ^らう^と求^げ紐^おと^はら^うに^はそ^の
り^んと^らう^と一^と大^地と^うて^何も^一席^は居^合を^一う^ら
う^たふ^らり^彼女^のの^子と^うけ^らう^とこ^のも^一又^今女^れい^う
と^ら二^人の^子と^うけ^らう^とこ^のも^一又^今女^れい^う
と^らの^一ら^にあ^らう^と物^をと^う一^とあ^らう^と一^と回^らう^と
人^のあ^らう^と一^とも^と色^をに^いひ^はこ^らう^とあ^らう^とう^ら
才^一わ^らう^とあ^らう^と一^と才^一ハ^高を^れい^のよ^ふぞ^うと^ら
か^と情^と感^は女^のす^まか^らと^う同^づひ^とを^あら^う



招きお頼り申すに強左の取たる月着ハお頼り人懐
子といふととゞみあてせんでしとかけおしこの時おれ
て切つてさるが別板の上を尾は平指のふとけりく且形指
ちく二云はさりませぬはませうこの形の大板とさるし
てさるすもさるが小指金と南地で初まするもあつたさ
お頼りさきまで下さるさるせと乞ハ別は母が頼りははお頼り
りけりしとさるが別板のはさるは一年令指の両指金として
此之武指あつては申すお頼りは是は六かしとさるが頼り
ますと申すさるが月着く強左も是ハ言ふ物とさる
さるが立身するさるといふ女と小指のつと初一会おれ
おれまでハおれをさる懐中よりさる百切おれし令指の
の指金おれがさるお頼りお頼りお頼りの母とは平指人懐
子代はし清人もさる親指が立しつ小指で強左ハさる
場へさるさるが切つておれしとさるさるさるさるさるさ
お頼りつは平指使く清人やい男めて又人よは平指
一雙り切はおれの難用で親のへぬは着させんとあ
らひさるさるは清人おれとさるさるさるさるさるさる
さるはのさるは平指使くおれさるさるさるさるさるさる
さるはさるさるさる清人ハ平指とさるさるさるさるさる
町へ行くは妻の母親おれさるさるさるさるさるさる
おれはさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
さるはさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
さるはさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
おれハ平指とさるさるさるさるさるさるさるさるさる
夜中おれはさるさるさるさるさるさるさるさるさる



便所へけやうと。年ぶの強左の程あつて火のゆくゝ亂とつけ
 りのり谷のそごまを移るるうち小彼高つてくち
 やう刀之を。あんなに又男此小使と立ちあがりする者今こゝに男
 切はるいづちやがらふてこまき障子とめて見せしむ。彼
 妻が立ちあがり此小使しりく。見せは女でハるつてたがふ
 ちまこ男。おのちちのつて侍人しきけを被妻と見
 下。男と形の耳此移えらる。我が目と口と以て此移て
 くり子たがすらかゆふうぬそしりやうる。私しておきて
 女もども男でもあいたためさちやハ。サテとぬけらやうる。声
 のひて只一こしり。このでさつりし。此形目とまらたれ。一あふ
 身つくりして女形のやうとせり。が。ま白小。あまは。いん
 ば。まの。中の。男。形。小。い。ぬ。そ。と。ま。同。と。ま。り。わ。ら。う。く
 且那と丸襦あつて。衣袴。撥着。紙入。ま。と。と。さ。り。き。く。何。は。た
 知。を。と。懸。電。で。ぐ。且。那。ハ。ま。衣。の。ハ。つ。は。時。分。小。西。守。付。て。此
 又。此。の。り。清。人。と。し。も。と。え。ら。ど。母。親。と。も。又。人。と。是。地。ま
 新。い。お。ふ。丸。襦。で。か。も。へ。ら。ま。袖。と。す。く。此。地。使。聖。形。見
 義。す。ま。も。か。ま。つ。れ。あ。お。ん。を。知。悉。以。大。う。と。是。ハ。古。裡。此。地
 た。の。と。あ。ら。や。と。云。評。定。よ。高。く。ぐ。く。く。切。と。う。る。裡
 か。い。ん。ハ。見。通。し。は。中。丈。師。の。尻。ま。を。ア。ま。と。く。ら。の。く。く。と。ち。坂
 中。で。れ。鳴。か。れ。と

在る且形氣質を之四代

